

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520288

研究課題名(和文)『ハムレット』のテキストにおけるパッセージレベルの異同に関する研究

研究課題名(英文) A Study of the Passage Variation in Hamlet

研究代表者

辻 照彦(TSUJI, Teruhiko)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：30197678

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：『ハムレット』の3種類のテキストのうち、Second Quarto (Q2)とFirst Folio (F)の間に見られる3行を超えるパッセージの異同に注目し、異同発生メカニズムの解明を試みた。First Quartoも含めたテキストの詳細な比較分析の結果、Fのみに見られるパッセージはFolioへの新たな加筆ではなく、Q2の基になったマニユスクリプトに存在していた可能性が高いこと、そして、現在までに提出されてきた作者改訂説は、シェイクスピアがQ2をFのように改訂したと考えられるほど説得的でないことを明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This study has focused on the passage variation between the Second Quarto and the First Folio of Hamlet and tried to solve the problem of its provenance. Through close comparative analysis of the texts, including the First Quarto, the present researcher has reached the conclusion that the Folio-only passages are not addition to the Folio but were present in the manuscript on which the Second Quarto was based, and that all the revision theories so far proposed are not persuasive enough to regard the passage variation as Shakespeare's intentional revision.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学・英文学

キーワード：シェイクスピア ハムレット テキスト問題 作者改訂説 First Quarto Second Quarto First Folio

1. 研究開始当初の背景

1983 年に出版された Gary Taylor と Michael Warren 編集による *The Division of the Kingdoms: Shakespeare's Two Versions of King Lear* が契機となって、First Folio をシェイクスピア自身による Quarto 版の改訂版とする作者改訂説が盛んに主張されるようになった。『ハムレット』についても、G. R. Hibbard をはじめ、Steven Urkowitz や Grace Ioppolo といった研究者により、Folio 版を Q2 版のシェイクスピア自身による改訂版とする主張が繰り返されてきた。研究開始時点で、これらの作者改訂説の根拠とされてきたパッセージレベルの異同について、網羅的かつ詳細に検証した研究は存在していなかった。

2. 研究の目的

本研究では、『ハムレット』の Second Quarto (Q2) と First Folio (F) という 2 種類のテキスト間の異同のうち、Q2 にのみ見られる Q2-only passages と、F にのみ見られる Folio-only passages というパッセージレベルの異同に注目し、First Quarto (Q1) も含めた 3 種類のテキストの比較分析により異同発生過程とメカニズムを解明し、その結果をもとに、F をシェイクスピア自身による Q2 の改訂版と位置づける作者改訂説 (authorial revision theory) の妥当性を検証することを目的としている。

3. 研究の方法

本研究では、Q2-only passage と Folio-only passage について、直前直後の Q2/F 共通テキストと共に詳細に分析することにより、異同発生メカニズムを解明した。また、上演台本に基づくテキストと言われる Q1 との比較により、パッセージを削除ないし追加した主体、時期、そしてその理由を検討し、その結果をもとに、F をシェイクスピア自身による Q2 の改訂版と位置づける作者改訂説の妥当性を検証した。

4. 研究成果

研究期間全体を通して、『ハムレット』の Second Quarto と First Folio の間に見られるパッセージレベルの異同についてはほぼ網羅的に分析することができた。その結果、代表的な F-only passage はすべて Q2 の基になったマニュスクリプトにもともと含まれていた可能性が高いこと、そして Q2-only passage をシェイクスピアが意図的に削除したとする仮説が説得的でないことを明らかにすることができた。またこの結果により、これまで『ハムレット』について提唱されてきた作者改訂説には妥当性がないという結論を導き出すことができた。個別のパッセージに関する研究成果は次の通りである。

(1) 3 幕 4 場の the 'engineer' passage

クロゼット・シーンの最後にあるこのパッセージの中で、イングランドに送られることになったハムレットは、ローゼンクランツとギルデンスターンがイングランドに同行することに加えて、彼らがイングランド王に宛てた親書を携行することをガートルードに語る。作者改訂説論者は、ハムレットがこれらの情報を知った経緯がテキスト上で説明されていないことと、この台詞の内容が神の摂理によって親書の書き換えに成功したとする 5 幕 2 場のハムレット自身の説明と矛盾することを指摘して、齟齬に気付いたシェイクスピアがこのパッセージを削除したと主張してきた

このパッセージを含む 3 幕 4 場全体と Saxo Grammaticus や Belleforest による原話を比較することにより、シェイクスピアはクローディアスがハムレット殺害を企むイングランド計画を描くに当たり、ハムレットがこの時点でイングランド計画を疑いやすいように原話を巧みにアレンジしていることを明らかにした。

また、ハムレットを殺害するためのイングランド計画に関する情報がテキスト上でどのように提供されているかを Q1 も参考にしながら分析し、5 幕 2 場で説明される親書書き換えのエピソードとの兼ね合いでハムレットは親書の存在とその携行者について知っていなくてはならず、the ‘engineer’ passage は親書書き換えのエピソードを成立させるために不可欠な情報をコンパクトな形で観客に提供するという重要な機能を果たしていることを明らかにした。

(2) 4 幕 4 場の Q2-only passage

4 幕 4 場はフォーティンプラスがノルウェー軍を率いて行進する冒頭の場面を残して、ほとんどシーン全体が F からカットされている。一部の研究者は、シェイクスピア自身がこのパッセージを削除したと主張している。

本研究では、このパッセージを含む 4 幕 4 場は、劇全体の中で 3 つの重要な機能を果たしていることを明らかにした。1 番目の機能は、立派なリーダーとしてのフォーティンプラスを観客に披露することである。4 幕 4 場の Q2-only passage の冒頭にあるフォーティンプラスの行進の場面は、最終シーンで観客が見ることになる彼の重要な役割に備えて、フォーティンプラスのイメージを前半の無鉄砲な若者という否定的なものから立派な指揮官という肯定的なものへと変更する機能を果たしている。

2 番目の機能は、デンマークを出国する直前のハムレットに、復讐の決意が鈍っていないことを再度表明する機会を与えることである。原話では、クロゼット・シーンでハムレットが母親の前で復讐の決意を表明する展開になっているが、4 幕 4 場の独白は、ハムレットが出国前に復讐の決意を新たにし、それを観客に訴えかける機会になっている。

最後に、4 幕 4 場が果たしている機能のうち、ハムレットがクロードディアスの命令通り

にイングランドに向けてデンマークから出発したことを観客が最終確認する機会を提供し、4 幕 5 場のサスペンスをより強調する機能について分析した。F と同様に 4 幕 4 場の大部分が削除されている Q1 では、4 幕 5 場に当たるシーンの冒頭に、王と妃がハムレットの出国について語る台詞が追加され、観客がハムレットの出国について確認する機会が別の形で提供されていることを明らかにした。

(3) Lord Speech

5 幕 2 場の 2 つの Q2-only passage のうち、レアティーズとのフェンシング・マッチについて再確認するためにやって来る無名の貴族(Lord)のスピーチを中心に分析した。ロード・スピーチは、オズリックの話を繰り返すだけの無駄なスピーチだとして、F からカットされていることを支持する批評家が多い。

5 幕 2 場のオズリック・エピソードからフェンシング・マッチの開始までの試合に関する情報の流れを分析し、ハムレットがフェンシング・マッチの開始時間と場所について最終的に確認できるのは、ロードの ‘The king and queen, and all, are coming down’ という台詞によってであり、ロードのこの台詞は、それまで未決定の状態が続いてきたフェンシング・マッチの時間と場所について最終確認する機会を登場人物と観客に提供する機能を果たしていることを明らかにした。

次に、ロード・スピーチの直後に位置するオーギュリ・スピーチを分析し、シェイクスピアはロードに王一行の到着を予告させ、登場人物と観客の緊迫感を高めた上でハムレットに胸の痛みを感じさせており、王一行が到着してフェンシング・マッチが間もなく開始されるという情報は、ハムレットが胸の痛み感じるきっかけであり、ロード・スピーチはオーギュリ・スピーチへの重要なアプローチとなっていることを明らかにした。

さらに、Q1 では、ロード・スピーチの表現の一部がオズリックに相当する Gentleman の台詞に盛り込まれており、Q1 の Gentleman やハムレットの台詞には、Q2 のロード・スピーチのものと極めて類似した表現がいくつか見られることを明らかにした。

(4) 'Denmark's a prison' passage

ローゼンクランツとギルデンスターンがハムレットと冗談を交えて再会の挨拶を交わす'Denmark's a prison' passage は、一部の研究者によって、シェイクスピア自身によって F に加筆されたものと考えられてきた。

F バージョンの展開を詳細に分析し、シェイクスピアが意図した展開は、クローディアスから機会を見つけてハムレットのメランコリーの原因を探るように依頼されたローゼンクランツとギルデンスターンがハムレットのメランコリーの原因を野心と思い込み、拙い手口で詮索活動を開始してしまった結果、逆にデンマーク訪問の本当の理由をハムレットから追及されるというものであることを明らかにした。

ハムレットが学友二人をスパイではないかと疑い始めるきっかけは、'Denmark's a prison' passage の中に描かれており、そのパッセージが欠落している Q2 では、ハムレットの学友二人に対する態度が、和やかなものから尋問調の厳しいシニカルなものへと急変する。この不連続性は、'Denmark's a prison' passage が欠落していることを示す証拠として有効であることを明らかにした。

さらに F-only passage とその前後の Q2/F 共通テキストを詳細に分析し、Fortune や beggar に関するトピックが連続していること、ハムレットとローゼンクランツの台詞には、単語やフレーズといったレベルのより細かいエコーが見られることを明らかにした。

以上の分析結果を踏まえて、シェイクスピア

アが 'Denmark's a prison' passage を後で挿入したという主張は、その実行可能性に問題があることを明らかにした。

(5) the 'little eyases' passage

2 幕 2 場でローゼンクランツから、ハムレットがかつて鼻屑にしていたシティーの役者がハムレットに奉仕するために宮殿にやって来ることを知らされたハムレットは、ローゼンクランツから最近のシティーにおける少年劇団の流行について説明される。そのいわゆる劇場戦争についてのやり取りが the 'little eyases' passage に含まれている。

the 'little eyases' passage で紹介される新しく流行してきた少年劇団と伝統的な成人劇団による劇場戦争の説明と、その直後の Q2/F 共通テキストに存在するハムレットのコメントを分析して、ハムレットは、少年劇団と成人劇団に対して、新王クローディアスと先王ハムレットをパラレルなものとして提起し、カモフラージュを施しながら、価値観の混乱という点で共通する劇場世界とデンマーク王国の間に巧みにアナロジーを描き出していることを明らかにした。

the 'little eyases' passage とその直後のハムレットのコメントには緊密な一体性が見られることや、小さな役者には小さな肖像画、買値が付かない不人気に対して買値が倍々につり上がるほどの人気というように、ハムレットのコメントには、the 'little eyases' passage のエコーと思われる表現が見られることを指摘し、the 'little eyases' passage が F への加筆ではなく、Q2 からの欠落である可能性が高いと結論付けた。

(6) 'The interim's mine' passage

'The interim's mine' passage は、イングランドに向けてデンマークを出発した後に、船上で親書を書き換えた顛末をホレイシオに説明した後に、ハムレットがクローディア

スに対する復讐の決意を再表明する重要なパッセージである。作者改訂説論者はシェイクスピア自身によって加筆されたパッセージだと主張している。

‘The interim’s mine’ passage とその直前のテキストを分析し、‘The interim’s mine’ passage とその直前の Q2/F 共通部分に跨って対句表現が形成されていることや、ホレイシヨウの台詞が Q2/F 共通部分の台詞と有機的に関連していることなどを挙げて、‘The interim’s mine’ passage の最初の部分とその直前の Q2/F 共通部分には緊密な連続性が存在していることを明らかにした。

また、このパッセージに関連して、ハムレットがフェンシングの試合の前にリアティーズに謝罪する動機と、ハムレットが最終的にクロードィアスに対する復讐を決意する動機について、Q2 と F でまったく異なるバージョンが意図されているという Paul Werstine の主張を検討し、テキストから Werstine が主張するような二つの異なる動機を読み取ることが容易ではないことを示した。

‘The interim’s mine’ passage と前後の共通テキスト間に見られる緊密な連続性を後からパッセージ追加して完成させることの実行可能性は低いことから、‘The interim’s mine’ passage は F への追加ではなく、もともと Q2 の基になったマニユスクリプトに存在していた可能性が高いと結論付けた。

以上のように、『ハムレット』のテキストにおけるパッセージレベルの異同については、重要なものをほとんど網羅して分析することができた。また、これらのパッセージに関連して提唱されてきた作者改訂説も網羅的に検証することができた。このように『ハムレット』について、先行研究を整理し、作者改訂説を網羅的に検証する研究は、国内外を問わず初めての試みである。

本研究を通して、パッセージレベルの異同を分析し、作者改訂説を検証するアプローチを確立できたことにより、今後、同じアプローチが『リア王』や『オセロ』といった作品に応用され、シェイクスピアの他作品についても作者改訂説の検証が進むことが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

辻照彦、『ハムレット』3幕4場の the ‘engineer’ passage に関する一考察、新潟大学言語文化研究、査読無、第18号、2013、pp. 79-97

辻照彦、『ハムレット』5幕2場の Q2-only Passage に関する一考察、新潟大学経済論集、査読無、第93号、2012、pp. 253-267

辻照彦、『ハムレット』の ‘Denmark’s a prison’ passage に関する一考察、新潟大学言語文化研究、査読無、第16号、2011、pp. 109-126

〔学会発表〕(計1件)

辻照彦、シェイクスピアテキストにおけるパッセージレベルの異同について、エリザベス朝研究会、2013年1月26日、慶應義塾大学日吉キャンパス

〔図書〕(計2件)

辻照彦、三恵社、ハムレットとパッセージの異同、2014、261

高橋正平・辻照彦編著、三恵社、ヒストリアとドラマ 近代英国に見る歴史と演劇のアスペクト、2014、pp.139-163

6. 研究組織

(1)研究代表者

辻 照彦 (TSUJI, Teruhiko)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：30197678